

《座談会》

共通と相違を明確に

—私の中の国際交流—

ジェフリー・L・バーグラント（高等学校教諭）

二 村 宏 江（大学文学部助教授）

高 木 保 興（大学経済学部教授）

H・リベッカ・ティール（能楽金剛流景雲会師範）

深 田 未来生（大学神学部教授）

——司会——

——（ABC順）——

ふるさとからふるさとへ

深田 「国際交流」というような言葉がよく使われるわけですが、私も最近、自分のことに関していざばん考えることは、私にとって「ふるさと」というのは何なんだろう、どこなんだろうということです。

私はアメリカに生まれて日本で育ち、長くまたアメリカの学校へ行っていました。そして日本へ帰って働くようになって二十六年になります。行ったり来たりというような、一つの国から他の国へ、あるいは一つの文化から他の文化へ移ってゆくという生活のなかで、自分の「ふるさと」というのはどこにあるんだろうということを思うのです。

ふるさとというのは、なじんでいるところから出て行って初めて存在する、出かけて行かなければ存在しない、そういうふうに最近思うようになりました。ですから、なにか未知なもの、いままで知らない世界、考え方、人との出会いがあって初めて自分のいる場、あるいは自分という人間がよりよく見えてくるんじゃないかと思えます。

「国際交流」という表現は、ひじょうに大

きな、むずかしい響きがありますけれども、そういうことじゃなくて、われわれが生きていく毎日の生活の体験のなかで、違うものに出会っていく、それが物理的な場所を変えなくとも、一種の国際的文化的交流の体験につながっていくんじゃないかと思うのです。

きょうお集まりいただきました皆様は、おのおのさまざまな体験を持って生きてこられた方ですけれども、初めに、どのような生活をしてこられたかを少しお話しただきたいと思います。

二村 私は八四年から八五年にかけて一年間、主人と同時期に在外研究の許可をいただきましたので、家族でイギリスのケンブリッジに行っていました。

その前、もう十何年も前になりますが、アメリカで大学院生として二年間過ごしたときと今回を比べますと、前は一人で、今度は家族でという違いもあり、行く場所も異なっているわけですが、前回とは比べものにならないほど多くの経験が得られました。私が得たものだけでなく、私の家族が得たものもまた私の得たもの、そういう経験の共有というところできて、ひじょうに貴重な、ほんと

うにいい一年間だったと思っています。

深田 先生のご専門は。

二村 英文学で、とくに中世をやっておりますので、その意味では今回のイギリスでの在外研究は自分の研究と直接に関係があり、ひじょうにありがたいことでした。

高木 私は深田先生と違いまして、外に出るようなことはなと思っています。自分の国籍は日本ですし、ふるさとがどこにあるかはっきりわかっているんですけれども、たまたま大学院の途中でアメリカに行くチャンスがありまして、いまから二十何年前です。それで四年半ほどいて、向こうでトレーニングをしまして、その結果帰ってきたら、専攻がいちおう経済発展ということになっておりましたので、現地を見なければというところで、チャンスがあるときに一年ほどインドネシアに行ったことがあります。

それ以後どういうわけか東南アジアにはチャンスがありまして、去年一年は大学のお金でマレーシアに行かせてもらいましたし、それからことしの夏休みは五十日ほどフィリピンの大学で日本の経済発展の授業を持ってみたいりました。あとビルマとかタイとか、あ

の辺を行く機会がありました。きょういろいろお話しする場合にも、アメリカはもうずいぶん前の話ですので、最近のものと、東南アジアだということになります。

深田 アメリカでのご勉強はどこでなさったのですか。

高木 テネシー州の州都のナッシュヴィルのヴァンダービルトという大学、その大学院に四年半出ていました。

深田 それではティールさん。

ティール 私はときどき不思議で、アメリカで生まれたことになったんじゃないかなあと思うこともありまして、生まれた六カ月するとき、家族と一緒に西宮にきました。父、母も関西学院のほうで宣教師として九年間ですかね、そちらに住むことになりました。

それで、六つのときに初めてアメリカへ帰りました。いろいろあって大学を出て、ある意味では自分のルーツさがしのために日本へまた戻ってきました。

大学の専攻が演劇で、お能の勉強を始めたんですね。お能の研究を続けて、金剛流の家元からの許可を得て師範免状を取りまして、少しずつお能のことを広めていきたいと思っ

ています。

バーグランド 生まれたのは昭和二十四年、南ダコタ州、アメリカ人のなかでも、聞いたことはあっても行ったことがないというのがほとんどです。

深田 そうですね、ほんとに。(笑)

バーグランド そういうなかで大きくなりまして、大学の三回生の夏休みに初めて同志社大学の留学生として日本にきました。一九六九年、十七年前です。それからアメリカに戻りまして一九七〇年大学を卒業して、九月からまた日本に戻ってきて同志社高校に就職しました。それから同志社高校十六年です。

先ほどの深田先生の話ですが、ふるさととはどこにあるかという話なんです、私のふるさととは高木先生と同じようにはっきりして



ジェフリー・L・バーグランド氏

います。ダコタの広い田舎に、坪に直すと三百万坪ほどの土地を持っています。町から五分ぐらいしか離れていないひじょうに観光地で有名な、四人の大統領がほってある山のすぐ近くです。その土地を守るのは大変です。

私はこのごろよく考えるのです。うちの子供にとつてふるさとはなんだろうかと。うちの家内は日本人で、子供は小さいときからハーフ、ハーフと。ハーフじゃなくてダブルですと、僕はずつと言いつけてきて、ふるさとは、京都と南ダコタと二つあるんだと。この二つのふるさとを大事にして、私が死んだときに骨を分けて二つの墓地をつくりたいぐらいの、二つのふるさとを持ちたい、そういう気持ちでいまこの会に臨んでいます。よろしくお願いします。

深田 お一人お一人たいへん興味深い体験が多くおありです、じゅうぶんにお話しいただきたいと思えますけれども、時間の制限がありますので、ごく最近日本から離れた体験をなさった二村先生の場合収穫として何が印象にいちばん強く残っているのか、その辺からお話しいただきたいと思っています。

二村 大学院のときは寮に入っておりまし

た。ですから日常顔を合わせ、つき合う人たちというのはだいたい同じような年齢の学生、しかも女子学生、それと先生方という風に人数の点でも、年齢の点でも接する人たちがひじょうに限られていましたね。

今回は一戸借りて住み込んだわけですから、出会った人たちの種類も多く、年齢層も様々でした。それに子供がおりましたので、これは日本でもそうですが、御近所も含めての地域の人たちとのつながりを無視出来ませんでしたね。またそれからより地域や人々をよく理解出来たと言えると思います。それからもう一つの収穫は、英語圏といっても、イギリスとアメリカとは異文化と言っていい程の違いがある、ということを経験つづき感じたことですね。

バーグランド 先ほどの近所づき合いです、日本の大掃除とか回覧板とか、そういうようなことはあるんですか。

二村 さあ、どうでしょうか。私たちの知る限りそういうものはなかったようですが、ただ毎月一回ウィンドウ・クリナーが来て、一軒づつ回って回っていました。私たちのお隣りは、カナダから来られた私たちと



二村宏江氏

同じような身分の方で、子供が二人、うちと同じ上が女の子、下が男の子、そういう関係でお互いが同じような立場であったというようなことから、おそらく普通の近所つき合い以上に親しいおつき合いができたように思います。でもこの場合は、イギリス人と、というよりもお互いに外部者としてのですね。

バーグランド いや、もう少しイギリスの風潮があるのかなと。アメリカというのは、引っ越しが多くてなかなか近所つき合いがない。

二村 総体にイギリス人はリザーブで他人の生活にも干渉しないというふうによく言われますが、それはある程度当たっているかもしれないですね。それぞれが独立して自分の生活を守っている、その範囲内での近所つき合

いという感じだったように思います。御近所には足が悪くて家に閉じ込められたまま、という方も含めて、一人住いの老婦人が割に多かったのですが、皆さんどこか凛とした威厳がありました。たいしたものですね。また、ずっと以前かで、誰かが気分が悪くなり道で倒れたら、それまで知らん顔で他人には無関心のようだったイギリス人たちがさっと寄ってきて、救急車を呼んだり適切な処置をした、というようなことを読んだことがあります。が、こういった人たちが隣人だと思えばちょっとゆう行き来しなくても心強く安心ですね。

深田 ティールさんの場合は、能の世界という、あまりわれわれが日常的に深く接しない世界でありながら、日本の伝統的な一つの存在、そういうところに生きてらして、いまのようなお話をどう思われますか。

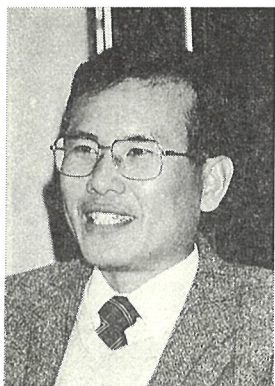
ティール そうですね、もちろん伝統的な古い世界ですね。ある意味で、横のつながりより縦の関係をすごく意識します。

家元に対していろいろな気を使うところもありますし、言葉遣いだけじゃなくて、それと自分の先生に対してのことですね。

高木 私は、能というのは名前だけしか知らないんです。まあ自分にほとんど関係ないものだと思っているんですけども、なぜ能のようなものが今日まで長いこと生き続けて、しかも廃れかかっているものじゃなくって、けっこう根強い人気があるのか、この機会に教えていただけたらと思います。

ティール たぶん一つは、正しく教えるために、正しく学ぶために、みんなそれぞれエゴを殺すというところちょっと言い過ぎかもしれないけど、そういういいものを育てていく、守っていく精神、そういう修業ができるようなお能の世界ですね。

バーグランド 彼女の能の先生と僕は一緒に二年間ほど住んでいました。僕はいまでも能をよく見に行きます。一つの文学作品であるところが劇であるところが音楽作品であるところが、人間が一つのものを見て美しさを感じるに当たって、自分の想像力を生かして、聞く、見ることによって、そのものの美しさが倍、三倍、十倍になっていくんです。すなわちベートーベンというのは、ただ聞くだけではベートーベンが美しいんじゃないくて、そのベートーベンを聞きながら、音楽と自分との関係の



高木保興氏

なかで自分の想像力が働いてきて、その音楽を通じて自分のなかでその音楽がもつともっと美しくなっていくんです。

能というのは、劇のいろんな形のなかでいちばん形としては動きが少ない。面をかぶった関係で表面が変わることもない。声も落ち着いた、一つ一つの音を伸ばして、そういう飾りのない世界のなかで、かえって見るほうにしては想像力で、動きのないもの、変わりのないものに対して補いつつ見る。見る側としては、能の美しさというんですか、おもしろさというものは、普通の劇と違って見ている者としてひじょうに参加できる。

高木 じゃ小説を読んでいるようなものですか。

バーグランド はい。

個人的な体験から

二村 いまバーグランドさんがおっしゃった「そのものの美しさが倍、三倍、十倍になっていく」ということ、そのものとかかわりの中で自分にとつて意味をもってくるということですね、これは異文化とのふれあいについても言えるのではないのでしょうか。私は、例えば、「イギリス論」とか「イギリス人論」というようなとらえ方はあまり好きではなく、ひじょうに個人的な体験から出発しまたそれをたいせつにしたいという思いがあるのです。ですから一般論として言えるようなことではなく、また他の人たちにとっては何の意味も感動もないものかもしれないけれども、じつはきょうこの座談会があるということ、私たちが帰りましたからもう一年以上上たっておりいろんな記憶とか印象も薄れておりますので、出がけにもう一度と思いまして、最初から終わりまでの一年間のアルバムを全部繰って見ましたが、胸に詰まるものがありました。

私はアメリカの場合もそうでしたけど、イギリスに行きましたときでも、旅の行きずり

の人も含めて私の出会った人々、あるいはなじんだ場所、それから自然の風物、季節の移り変わりですね、ほんとに何げない小さなことなのですけど、そういうことが私の心のなかにずうっと積み重なっていき、そういうものに對してひじょうな愛着を感じるのです。理論とかそういうことでなくて、ほんとに簡単なことなのですけど、好きになって帰ってくるのです。

そして、もしもイギリスからどなたかが来られたら、この私のイギリスに対する思いを、その人に返すというか、気持ちを伝えたいというふうに思いますね。

観光案内的なもののイメージではなくて、人や場所とのふれあいが出来たことが何よりもうれしいと思います。

バーグランド 自分の国に帰ってきて「どうでしたか」って聞かれて、「大好きだった」と言った人は、人とのつながり、場所とのつながり、そういうつながりができた人です。「もうひとつでした、あの国は好きにならん」というのは、人との関係、場所との関係と、そういうつながりができてない。その一つ一つの国はいい悪いというのが絶対ないんで



H・リベッカ・ティール氏

す。自分との関係のなかで好きになる。

二村 そうですね。ポピュラーソングの歌詞ではないけど、私の心をそこに残してきたというふうな感じがしますね。それで、いつかそこにまた帰って行きたいと。これはアメリカの体験でもそうですが、そこで苦しいことも楽しいことも経験したその年月というのが、やはりその後の自分の心のなかにたいせつな宝物として入っているような気がします。

深田 いまも話題になっているように、ティールさんのように、アメリカという一つの文化から来て日本のなかにおいて日本人が一般的に理解したりなじんだりしていない能の世界に生きている。

今度は視点を少し変えますと、日本人とい

う存在がアジアのなかに存在しながらも、アジアというところが欧米のように親しめる、なじむところになってないという側面があると思うんですね。そういうときに高木先生は、アジアとの関係をひじょうに深く体験されてきたわけですが、アジアに行つて過ごされて、先生にとっていちばん大きかった体験とは、どういうことでしょうか。

高木 そうですね、いちばんと言われますとちょっと困るんですけども。

深田 自分にとつてたいへん意味のあったことは。

高木 先ほどの話と関連しますが私がいつも不思議に思うのは、インドネシア、マレーシアに行つて、そこに一年なり二年なりおられる日本人の方にお会いして、その国のことを聞きますと、大きく二つのグループに分かれます、一つのグループは、その国が好きで何から何まで全部その国の味方のような発言をされる。もう一方のほうは、こんな国はあかん、何をやるとると、もうこんな国早く出ていきたいと、こういう極端な二つのグループに分かれるようで、真ん中の辺に位置する日本人の方がいらっしやらない

んです。

それで、ヨーロッパとかアメリカとはまた体験が違うんだと思いますけれども、好きになつておられる方というのは、いろいろお話を聞いてみしても、好きとか嫌いというそのものが感情的なものなので、なんか矛盾したことがけっこうあるように思いますし、あんまり熱狂的に好きになるのも、感情的に嫌いになるのも、そういうふうにしてその国を見ると、どうも見誤るのではないかと思えます。私はできるだけ冷静に見ることにはしていますので、特別にその国が好きだとか嫌いだとかいうような感情は、あんまり持つて帰ってこないですし、とくに日本人のなかでもピンからキリまで人がいまして、人間としてつき合うときに楽しい人もあれば、もういやでいやでたまらない人までいるのと同じで、どこの国でもやっぱりピンからキリまで人がいてたまたま自分が出会った人がいい人だから、その国がすばらしいんだというふうに考えるのは、これは妙ちきりんな話だと思っています。それで私は、この人はこの国ではいいグループの人なのか、この国の人でこういう人はどうもつき合にくいなというよ



深田末来生氏

うな分類の仕方をしていきます。

いちばん東南アジアで印象に残ったことと
いいますと、私がとくに最近考えますのは、
たくさん日本人の方がこのごろ来られている
んですけども、そのなかのかなり多くの人
たちが、基本的に自分たちは東南アジアの国
の人間よりはすぐれているんだという発想を
持っていらしやるのが怖いんです。よく聞

いてみますと、結局は、たとえば日本だった
らこういうことは全部きちんと整っている
し、できるんだけれども、この国はできない
といったようなことから、いつの間にか、
おれたちはこっちの人間よりすぐれているん
だというような発想になっているように思
います。それはなにも自分の努力でそうなっ
た国にいるわけじゃなくて、過去の人がやっ

れくたんで、たまたまいま住みやすい国に
いるだけの話なんです。そうなると、その方が
ヨーロッパとかアメリカに行かれたら、今度
は、逆にむこうの人よりは一步下がってつき
合われるのではなからうかという危惧を持
っています。

どちらかといいますと、私はアメリカとか
ヨーロッパに行ったときには、それこそ一生
懸命になってむこうの人と競争して打ち負か
してやろうという気にはなりませんけれども、
東南アジアの人はいろんな条件がむずかしく
て、なかなか毎日の生活が快適でないところ
ですから、そこで優越感を感じたいとは全然
思わないんです。優秀な人というのはたくさ
んどこの国にもおりますので、その辺の日本
人の考え方が、もう少し変わらないものなの
かと思います。それが国際交流をなにかの形
で進めていくことによって少しでも減るもの
なら、やってみたいと思っています。

深田 そのアジアでの生活、インドネシ
ア、マレーシアでの体験のなかで具体的に
出会った人間との間に成り立った関係で、い
ちばん先生にとってたいせつであり、新鮮で
あったのはどういうものだったのか、それか

らそういう関係が、異国、異文化のなかで自
分とは違う背景を持った人であったからそ
ういう関係ができたのか、あるいは日本で
も、人間と人間との関係ができるときは同
じようなことなのか。いちばん親しくなった人
はどういう人だったのか、こういう事はど
うでしょうか。

高木 たとえば、私は主に研究で行きま
すね。そうすると、日本で研究しているとき
には、自分の論文ができたと一緒に発表して
コメントを聞きたいというふうにすぐに思
うわけで、それと同じようなことを、たと
えばインドネシアに行きましたときには、
中央銀行にいましたから、そこでやろうと
思って自分の書いたドラフトを回してみ
たんですけども、これはほとんど反応がな
くて。後で考えましたら、日本の場合に
は、直接に現実に役に立たないような
ベーパーでも、ちょっと理論的なベーパー
だったら、それをいくぶんか発展させば、
やがてはいろいろなことができるだろうと
思うんですけども、アメリカでもヨーロ
ッパでもたぶん少しは注意を向けてくれ
る人はいらっしゃるし、議論の相手をして
くれ

るんですけども。東南アジアでは、それほどそういうことにかまっている暇はない現実すぐに役に立つのなら積極的にやりたいがすぐに役に立たないものは興味が無いという方がひじょうに多いようです。

それはなぜかという点、高等教育を受けた人があまり多くないために、優秀な人は政府関係のいろいろな仕事をたくさん受け持っている、あるいは国連からの仕事があれば、そっちのほうの仕事を取って一生懸命研究して、それで副収入を得たりしている人が多いですから、こちらが求めているような相手役を見つめるのがひじょうにむづかしいということになります。

それは、マレーシアのラヤ大学に入れてもらったときにもやっぱり同じようなことで、なかなかむこうの人と経済学の理論について議論するような場というのが持てませんでしたし、またそういうものにあまりむこうが熱意を持っているようにも見受けられないんです。ですから途中から考え方を変えまして、そういうところに行ったらそういうことはやめようと、現地の経済のことをこちらが一生懸命知って、それを日本に帰って紹介す

るほうに回ろうという形に態度を変えました。そうしますと、全体で人間と人間としてつき合って好きになるような人というのは、そういう形では出てきませんでした。ですから深田先生のその質問に對しましては、どうもきちんと具体的なことをお話しできるような立場にないことになります。

深田 単に人間と出会うだけではなくて、自分がいまままでの世界のなかになかったものを見たり聞いたりすることによって、自分のなかの世界というものがそれにつながって広がって行く。さっきシェフの話に、自分の子供はハーフじゃなくてダブルだということ、子供だけじゃなくて大人もいろいろの意味で、自分のなじんんでいるセッティングから出ていくことによって、それがダブルになったりトリプルになったりしていくということがあると思うんです。シェフの場合はそれがダブルなのかトリプルなのか(笑)。

さっきの南ダコダの話じゃないですけども、あの土地を全部日本へ持ってきたら、もうなんにもなくても後は暮らしていけるわけですね、あの土地は全部アメリカン・インディアンに返したらどうでしょうか(笑)。

バーグランド 生徒に毎年同じような話をします。二十のときに初めて海を見た。アメリカ大陸の真ん中で大きくなった人間というのは五割か六割ぐらい、まあ飛行機が最近安くなりましたから、もう少し出る人間が多くなったかもしれませんが、五、六割ぐらいの人は死ぬまで一度も海を見ない。その海の広さにまず驚いた。地球儀を見たら地球のほとんどが水であるということは頭のなかでわかっている、実際海を見ようというのはいらない体験なんです。

同じように日本のことをいくら本のなかで勉強しても、頭のなかで人口密度が高いとか古い文化と新しい文化は対立している、またお互いに支え合っていると、そういうことをいくら本で読んでも、実際に日本に来るまでは、その人口密度の高さ、古い文化と新しい文化の極端な差とか、そういうものは感じなかったんです。

東京に着いていちばん最初の日、二十三人の留学生が新宿駅に行きました。新宿駅に着いたのは朝の八時ぐらいです。ちょうどラッシュアワーの真っ最中です。僕は三十分ぐらい新宿駅のなかに立って仕事に行く途中の

人たちを見ていて、二十までに見た人間よりもいまの三十分で見た人間のほうが多いと思いました（笑）。だから高木先生の話のなかで、ピンからキリまでいろんな人間がどんな国にもあるという話、そういう言葉を聞いて、日本はとくに人と出会う機会が多くて、どこを歩いても人と出会う。山のなかへ行っても必ずだれかほかの人もその同じ山を登っていますから、この十七年間いろんな人に出会いました。一人一人のひととの出会いを考えたときに、やっぱり僕は日本に来てよかったなあと 생각합니다。

結婚したときに、二人の人間がまったく違う立場からスタートして、だんだん仲よくなくなっていく、少しずつ自分というものを覚えていく。そうしないと、結局平行線のままでずっとと生活して、なかなかほんとうの夫婦になれないのと同じように、異文化と初めて出会って自分がだんだんその文化に近づいていて、その文化の人間、よその国の人間がだんだん自分に近づいてくる。そのなかでほんとの友達、友情関係が生まれてくる。

最初日本語がまったくできなくて経験した一年ぐらいの思い出というのは、ひじょうに

薄いんです。僕は最近言葉と思い出との関係をよく考えて、日本の最初の一年間ぐらいは、ほとんど思い出せないんです。なぜかという、日本での経験というのは、日本語による経験になってきたんです。だから最初の一年間というのは、英語で経験した。自分の頭のなかでは常に英語で考えて日本文化と接しましたから、その英語の思い出というのは、どこか薄くなって消えてしまったんです。日本語を少ししゃべるようになってからだんだんいろいろな思い出ができて、三年目ぐらいからの思い出のほうが最初の思い出になってきたんです。

そういう言葉のなかでの人間関係、言葉ができる以前と言葉ができてからの人間関係というのは大きく変わるような気がします。

深田 そういう点はどうですか、ベッキ

ー。
ティール それはそうですね。そういう表現をきょう初めて聞いたんですけど、そう思いますね。

本当のコミュニケーションとは…

深田 そうしますと、いわゆるコミュニケーション

ーションのむずかしさ、コミュニケーションの壁というものは、どうしたら乗り越えられるのか。いまシェフが言っているようなことは、単語や文法を覚えて、一つの言葉がただ使えるようになるということだけじゃないでしょうね。

バークランド 僕も一つ覚えているのは、来てから二週間ぐらいたって、鴨川の川辺に立って中学生ぐらいの男の子が魚釣りをしていました。二人で話をしました。まったく日本語ができない僕で、その少年は中一程度の英語しかできなくて、二人が砂みたいところで絵をかきながら、まず自分の家族、お父さん、お母さん、兄弟をかいいて、これは僕です。私は英語でしゃべって彼は日本語でしゃべる。でもじゅうぶん通じたような気がするんです。だからそのときの文法とか単語力とか、そういう面では言葉の壁があったかもしませんが、言いたいことはじゅうぶん通じました。

しかし、絵をかいいてできるような話というのは、深みがないんです。自分が一つの文化に入り込んで、文法的な面、単語的な面で言葉が上手になっていく、それだけじゃなく

て、その文化と自分とだんだん接する機会が多くなって、知らないうちに自分をもっと深い話ができるようになっていく。だから、単に日本に来て一生懸命に日本語を勉強したって、いろんな人と話ができるわけではないと思うんです。日本の文化に深く入っていくなかで、人といろんな深いつき合いができるようになる。

二村 コミュニケーションと言語ということですが、子供が経験したことをちょっとお話ししたいと思います。上が女の子で四年生、下は男の子で一年生だったのですが、じつは全然英語がしゃべれなかったのです。私たちもあえて教えなかったのですが、その状態でイギリスの現地校にばっと入ったわけですね。親のほうはちょっと心配だったのですが、一つは受け入れ態勢がひじょうに整っていたということ。ですからこれは日本人だ、外国から来た生徒なんだという特別扱いを先生がされずに、とにかくすつとクラスのなかに入れてしまわれるのですね。

学校から基本的な、たとえばトイレに行きたいとか、おなかが痛いとか、ちょっと気分が悪いとか、そういう必要な言葉を英語で書

いたものをうちに持って帰りまして、これを日本語に訳してほしいと。何かあれば、英語が話せなくても先生にそれを見せば意思が通じるからというふうなことで、最初のころは先生がそういうものを子供に持たせてくれました。

とにかくそういう無に等しい状態から出発したのですが、ひじょうに親としてありがたかったことは、一日も、自分が英語がしゃべれないから学校に行きたくないと言ったことはないので。とにかく楽しい、楽しいって帰ってくるのです。何が楽しいのって聞く、具体的にそれは出てこないですね。なんかこうらしいっていうふうに言うのですが、じゃ先生どうだったのって聞くと細部にわたるとそこがわからないですね。ただ全体の印象としてひじょうに楽しい、自分たちは新参だけでも、しかし決して疎外されていないというそういう雰囲気があったのだと思います。そんななかで何カ月かたちまして、そうすると加速度的に、急にある時期ふっと英語がわかるようになってきました。女の子などはかなり難しい本も読みこなせるようになりました。

子供は言葉なくして遊べると、よく言われますが、大人の場合と子供の場合とは違うのでしょうか、言語というのはコミュニケーションにとつてどの程度必要なのかなということですね。もちろんあるにこしたことはないのですが、それがなくてもなにか通じるものがあるということです。ですから、子供たちが将来そういう経験をどういうふうに生かしていくてくれるかなと思ったりします。あれはほんとに驚きでした。

深田 子供というのは、単に吸収力がゆたかだということだけではなくて、基本的に、きわめて弾力的に生きていく素質を持っていると思うんですね。そういうときにした体験が性質にも大きな影響を及ぼすんじゃないかと思います。サード・カルチャ・チルドレン(Third culture children)とかいうふうな言葉があって、これは根なし草というか、どこにも所属しないような存在という形で見られるときもありますけれども、ある面からいったら、違う文化のなか、どこへ行ってもそこに根差して、それを自分のことにするという可能性も秘めた場合もあると思うんですね。

ベッキーの場合は、さつき生れて六カ月とおっしゃいましたか。

ティール そのくらいですかね。

深田 六カ月ぐらいで日本へ来て、その間、何年か一度は親に連れられてアメリカへ行かれたかしれないけれども、実際は日本とアメリカがまざったような環境に育ったわけですね。

ティール そうです。

深田 自分のそういう育った環境を思い起こして、どうお思いになりますか。

ティール 「ふるさと」というものは、別な場所というよりもその環境の思い出、家族、人間とのつき合った時、所になるわけです。だから、ふるさととは場所じゃないと思います。いつでもなかに持っているという気持ちがあるんですね。

小さいとき、金髪でもっとチリチリとなっていて、友達と同じ物を持って遊んでいても、大人が来ると、「あ、かわいい、お人形さんみたい」と。なんで違う存在に見えているか、不思議に思ったこともあったんですね。そのとき、こっちで育っていると、内面に持っているものと外面から、ほかの人から見たも

のの違いをすごく意識してきました。

それでもたアメリカへ行ったときに、そのときは同じような金髪の子がいっぱいいて同じかなと思ったら、内面的な育ちとか思い出が違ったから、また同じとは言えませんでしたね。

二村 金髪のことだと思い出しましたが、男の子はイギリスでよく金髪の子供たちの絵を描いていましたね、写生画でないので。それが日本に帰ると、いつの間にか髪の毛が黒くなっていました。

深田 先ほど、大学を出てルーツを探すような気持ちで日本へ来たとおっしゃったのですが。それは、アメリカで勉強して大学へ行っている間の体験で、アメリカにルーツがあるという確信がなかったわけですか。

ティール やっぱりずっと残るものももちろんありますね。みんなのなかに。それは梅干しの味であるかどうかわからないですけどね。(笑)

深田 それをもう少しはっきりさせたいと。

ティール そうですね。

高木 どうなんでしょう、もう私はあきら

めているんですねけれども、結局発想の仕方じゃないかと、このごろよく思うんです。

小さい子供というのは、場所が変われば、その場所に合うように早くアダプストできるような状況になる。そうでないと生きられないせいじゃないかと思えます。それですぐに発想方法が転換しやすいんじゃないかと思えます。

ところが、われわれみたいな年になって出かけて行った場合には、発想方法が決まっていますから、それと違う言葉でやられたら、こっちの言葉の発想方法を用いないと、こっちの言葉はうまくならないんじゃないかという気がしまして、そうすると、ふるさとって何だろうといったら、やっぱり自分が持っている発想方法がどこに根差しているかということじゃないですかね。

私の場合は、もう完全に日本人的な発想方法になっておりますから、いちばん苦しい、しんどいときには、そっちのほうの社会に戻ってきて、そっちのほうの発想方法で話せる人と話し合ったら、精神がファーストとリラックスできると。これが、ふるさとだと思っているんです。

ところが、先ほどのサードなんかおつしやられた場合には、たぶんいざ自分が追い詰められたときに、どこかでリラックスできるものがひょっとしてなかったときには、根なしというような形になって、最終的には神経がまいってしまふんじゃないかと思えますね。

深田 不幸ですね。

バーグランド 高木先生の言っていることはよくわかるんです。最初の四、五年のなかで何回か追い詰められて、自分が怖くなるというのかな、自分というものがどこにあるのか、やっぱり英語の、もとの自分のアメリカという国のところに逃げていくんですね。

しかし最近思うことは、単なるアメリカじゃなくて、それ以前の人間というものがあるような気がするんです。文化に関係ない、何かがあるような気がするんです。その上に文化というものがついてしまつて、ほとんど自分の文化のなかでそれを考えるから、どうしても外側から見ると、その文化しか見えななんです。それ以前のものが何かあるような気がするんです。子供がなぜ大人より早く言葉とか習慣とか身につけるかというと、やっ

ぱりもとのものに近いからだろうと僕は思うんです。

すなわち、生徒にいつも言うんですが、中学一年で英語を初めて、中学三年間、高校三年間で六年間英語をやつて、高校を卒業して大学に入るに当たつて、できるだけ英語を忘れない、いわゆる大人になっていくということとは、いままでわかつていたことを忘れていく、その忘れることをできるだけ少なくする。そうすると、大学を卒業するときに英語をたくさん覚えていた者のほうがよい。

同じように子供のころに、もとの人間に近いからひじょうに柔軟性が強いというんですか、よその国に入つたときに、すぐ方向転換ができる。しかし大人になると、もとのものを忘れている面がある。だから僕は、これぐらい日本が長くなって日本語をしゃべつて、このごろなにも怖いときはないんです。日本人と同じように対処をするときもあるし、アメリカ人として対処をするときもある。

これから僕がよその、いわゆる英語も日本語も通じない国、両方の文化から遠く離れた国で十年間、二十年間過ごすことになりまして、早くむこうになれていくと思うんです。

よ。いま自分としては柔軟性を持っているような気がするんです。そのもとの自分というのは見詰めてきたつもりです。そうせざるを得なかったんです。

日本のなかで裸になって、もうどうしようという、そこまで追い詰められて、個々のアメリカ人じゃべつたつて、少しは安心するんですが、それだけでは安心できません。キリスト教のお祈りのなかでまた自分というものを確信しようとするのですが、やっぱり最終的に何か文化を超えたものに気づいたような気がするんです。一ぺん気づくと、これからどの国へ行つても、たとえば食べ物で、どんなものでも、その現地の人がおいしいものを食べているから、日本でコノワタとか、いろんなものになれてきたから、どこの国へ行つても僕はなれていくやろうという自信を持っています。だから、子供というのは、もとのものに近いから自信を持っているというんかな。

深田 ジェフは自信持っているからいいですけどね。高木先生はどうですか。

高木 私は、キャパシティーは変わらないという考え方でし、いまのお話を聞きまし

たらキャパシティーというのは訓練で決まるという発想だと思うんです。私はこれ自体は変わらない。だから子供が柔軟にいくというのは、前のあるやつを全部捨てちゃうからすつといける。私は前のがほとんどで捨てないから、後で入ってくるものがちょこつとしかない、こう思っているんです。

いままで分析する限りでは、例外というのは何人かの人がいらっちゃって、それはキャパシティーがだんだんふえていくんでしょければ、凡人は変わらないんじゃないかと思っっているんです。むしろ私がいまのものを捨てて、たとえばずっとアメリカ式の物の発想になれたら、英語はうまくなるでしょうけれども、今度は日本に帰ってきたときに、日本の方とのつき合いが、まずむづかしくなるんじゃないかというふうに思っっているんです。

私は国際交流というのは、自分の国の発想方法はこうだ、相手の国の発想方法というのは全然違ってまたこうなんだということをはっきりわかって、その差を理解したうえで話していたら、うまくいくんじゃないかなと思います。なにも相手の発想方法に自分になら

ないと、うまくいかないものじゃないんじゃないかなと、このごろはそういうふうに考えるようになりました。

深田 それはね、やはりある一定の年齢に達してのあきらめですか（笑）。

いまのジェフの話を聞いていると、それは子供だけではなくて、人によっては、自分の主体を保ちながらも、人の物の考え方のなかに入っている人はいると思うんですね。

高木 そう思います。

弊害になるものは…

深田 それはよほど例外的な人なのか、そうじゃないのかということとは別ですけれども、われわれが違った文化、あまり親しんでない場所や人間に接するときに、ほんとうにそれが自分をゆたかにし、また出会った人をゆたかにする、またそのプロセスの弊害になるのはどういふことなのかと思うのですが。

さっき高木先生のお話で、アジアに出かけていくたぐさんの日本人について、だいたい二つのカテゴリー化ができるとおっしゃいました。せっかく自分の場から違ふところへ行つた以上は、それが最大限自分にとってゆた

かな体験になるのが望ましいわけけれども、なかなかうまくいかない。弊害になるものは何なのか。当然言葉のハンディもあるけれども、いまのお話を聞いていると、言葉というのは重要だけれども、必ずしも決定的じゃないということですね。

二村 子供を見る限りにおいてはそんな感じがしました。それを超えたところでコミュニケーションができていたという感じがしました。

それから先程高木先生が、東南アジアで二つのタイプの日本人があるとおっしゃっていましたが、ただ好きになるといふことと、それに自分も同化してしまうこととは、また別だと思ふのです。外に出ますと、いちばん見えてくるのは日本です。自分は日本人であるということですね。そのときに、それを否定するかどうか、それぞれの態度のとり方があると思ひますけれど、私の場合は、やはり日本人でよかったと思うのです。日本の文化や自然のこまやかさが一番落ち着きますから。そういうことに改めて気づいて帰ってきますね。その国が好きでもすぐそれをまねをするようでは……。

きょうはお二人アメリカの方がいらっしやいます、日本の方でまったくアメリカ人と変わらないように英語がしゃべれて、発想もひじょうにアメリカ的な人というふうな、深田先生はちょっと別にしまして。

深田 僕の発想はあまりアメリカ的じゃないですよ。態度だけがアメリカ的だといわれます(笑)。

二村 そういう方と接せられたときにどう思われますか。日本人に対してそういうふうになってほしいと思えますか。

バグランド 最初、日本に来ていちばん感じたのは、英語をよくしゃべる人というのは、案外友達になれない。異常に外国に興味を持って英語を一生懸命やる人のなかに、コンプレックス的なものを持っている人間が多いような気がするんです。たまたま自分の研究、また仕事のなかで外国へ行かざるを得なくて、外国に行った。そのなかで英語がうまくなった。外人とあまり変わらない。四年、五年、六年、海外生活をしてきた、そういう人は案外二村先生と同じように、日本人でよかったと自分の国に誇りを持っている。ただ英語はうまい、外国文化と深く接して外国文

化も理解している。そういう人は別にそう思わないんです。

「あなた日本人になりましたか」とよく聞かれるんです。日本人になるつもりはまったくありません。僕はアメリカ人であることを

ひじょうに誇りに思っています。ただ、物理的に二つの国に同時に住むというのは不可能なことです。できたら僕は二つの国に同時に住みたいんです。それはできません。とくにいま子供が小学校、中学校の間は、やはり一つのルーツをつくらないといけないと僕は思いますから。子供を引きずってあっちこっち生活すると、子供が落ち着かない人間になると思うんです。だから同じ家でずうっと子供が高校ぐらいまで大きくなって、それからアメリカ半年、日本という両国に住めるような形になったらいいなと思っています。僕は日本人になりたいとか、日本人になつたとかいう気持ちはまったくないんです。

ティール 自分になりたいんですね。

二村 それがたまたまオーストラリア人であつたり、アメリカ人であるだけなのです。

深田 そうしますと、いまの「自分になり

たい」とゆう、ここがなかなかむづかしいんです。二村先生はイギリス人が好きだ、でも日本に帰ってきて、ああ日本人でよかった。

ティール そのことは矛盾していますか。

深田 ちょっと待ってください。矛盾といえはわれわれみんな矛盾しているんですよ。ジェフの場合はどう思うんですか。アメリカへ行つたときは、ああアメリカ人でよかった、岩倉へ帰ってきたら、ああ岩倉人でよかった。

バグランド いつも帰るときに生徒を連れて帰るんですよ。この前、夏休みに五人連れて帰つた。生徒が「先生みたいに早く変わる人は知りません」って言います。アメリカへ帰ると、だいたい三日たつたらアメリカ人になるんです。日本語の発音とか単語とかが乱れてきて、先生何を言ってるかわからない。三日ぐらいたつたら、英語がさつき、さつきと出てきて、自分の座り方とか歩き方とか、みんな変わっていくんです。アメリカ人になっていくんです。

深田 内股が外股になってくるわけですか(笑)。

バグランド 日本人というのは歩くのが早いんです。アメリカではのんびり。日本に帰ってきたら、また岩倉人になります。

深田 リエントリーの問題ですね。リエントリーというのは、一ぺん自分の場を離れてよそへ行って、そしてまた戻ってくるという。行ったときにももちろんカルチャ・ショックがある。ところがリエントリーのショックというものもある。リエントリーのショックと人が呼ぶものは、僕は必ずしもマイナスだと思わないですね。

ただ、いまのシェフのようなのは、リエントリーがあるかわからないといったんですけれども、この出たり入ったりするときに体験する、そこに抱く思いとか、深める考えとかというのは、結構プラスの面がある。そしていまのベッキーの自分でありたいという、いささか理想主義的な表現はすごく大事なことだと思えます。もう少しそのことを説明してください。

ティール 最近アメリカへ帰りました。私の場合は、アメリカ人はみんな早くしゃべるなあと思ったりとか、また「アメリカ人ですか」「イギリス人と違いますか」と聞かれ

たり。

深田 それは日本ですか。

ティール いえ、これはアメリカで。なんでもかわかりません。日本人ですね、毎日パンですか、御飯ですか、何食べていますとか、いろいろ聞かれるんですね(笑)。

それに、自分の選択力で私に合うものを選びたいと思います。もちろん周りの人、友人、いろいろの関係の人たちがいます。それをうまくゆたかに暮らすように生きていきたいんです。それはどういうふうにするかが問題になりますね。日本の文化から、またアメリカの文化からも、私に合うものを取っていききたい、うまくそういうふうに調節して生きていきたいと思えます。それで自分をつくれるですね。

深田 われわれは日本に住んでるわけですが、けれども、いろいろな社会のなかでも、日本ほど自分であるということを実現させるのがむずかしい社会というのは少ないと思うんですね。

あらゆる側面で日本の社会を支配しているものは同化とゆうことです。これは日本にとくに長く住む外国人に対する日本の社会と日

本人の扱い方のなかにあらわれて来ます。日本という社会がほんとうに深い意味で、人間的によりゆたかな社会になっていくためには、日本はこうだという枠組みがもう少し揺さぶられたほうがいいんじゃないか。

そのことを外国に行くと、あるいは外国から帰ってきたリエントリーのときに、強く感じるのです。シェフみたいに三日とは言わなけれども短期間の間に、われわれ自身もそういう社会の流れの中にはまり込む。それがいちばん自分にとっても心地よい生き方だから、そうなつてゆく。でもよく考えてみると、それは必ずしも自分自身であるということとは違ったりしますね。それは外国人で日本に住んでいる人だけじゃなくて、日本人についても言えるんじゃないかと思うんですよ。この辺はたいへんむずかしい問題ですけれども。

日本のなかにおいても、異文化の体験というのはいろいろある。単一民族的な、日本人がみんな日本語をしゃべるからお互いによく理解し合っている集団だろうと思うと、そうじゃない。それは関西と関東の人の間ですら、それが直観的なかどうか知らないけれ

ども、差があったりするわけです。それでもお互いに接し合うなかで、われわれは得るものがある。それが社会をおもしろくするし、人間をゆたかにする。そうすると、そういう枠組みをさらに超えて、違うものに接していくという体験がひじょうに大切だと思うんです。

高木 先ほど先生が言っていたなぜ日本という国は一人一人もつと出ないような社会なのか、いつもずっと人に聞き回っている状態でして、みなさんどう思われているのか、ひじょうに知りたいんです。

深田 その問題へいきましよう。

私にあうもの——自分になるということ

高木 よく日本人論というのが華やかにありますね。私もつくづく日本人のものの発想というのは世界のなかで特殊だと思っているわけですから、日本人が外へ出て行くときには、自分たちがいかに特殊な発想に基づいて毎日暮らしているかということを知らずに出て行ったら、たいへんなことになると思います。

一例は、たとえば日本では、人にものをし

てやったら、必ず相手はそれに相応したものを自分にしてくれるだろうという発想をよくしますけれども、このような形で海外に出かけると、往々にしてカルチュア・ショックを得て、むこうの国がいやになって帰ってくる。昔は青年海外協力隊の方がかなりそういう形になっておりました。つまり、青年海外協力隊の一員としてむこうの地方の農村に入り込んで、日本だったらこんな生活をしないんだけど、現地の人と同じ生活をして、そして現地の人に、たとえばキャベツのつくり方とか、いろいろなつくり方を教える。私はこんなに一生懸命になって毎日やっているのと、当然むこうの人も一生懸命やってほしいと、こう思うんですね。

ところがむこうの人の立場に立ったら、彼は好きでここへやってきたと、彼が私らと同じ物を食っているのは、好きだからだろうと。彼らがそういうふう考えたとしても、これは不自然じゃないと思います。そうすると彼らは、特別に日本人の方がいまままで違ったことをやっているのに、一生懸命になって参加したいとは思わない。日本人の方は、これだけ私が一生懸命やっているのに、あの

人たちはなんじゃというんで、頭にきて帰ってくる。

これはまさにひとり相撲でして、もしそうなら、そしてじゅうぶんな余裕があるなら、どんなに現地のなかへ入っていても、自分にいちばん快適な生活の場所を自分でつくって、それが周りの人の生活と違っていても構わない、そこで自分が犠牲になっているということをなくすほうが、ずっとベターだと思っているんですけどね。

ですけれども、なぜそんな大きな発見方法の違いが外国との間に出ているのか、そういう日本の発想方法が生まれてきたのはいったいどこに原因があるのかが、いちばん知りたいんです。

そういう発想方法というのは、たとえば江戸時代のころにつくられてきたのか。明治以降は、どちらかというと日本の発想は方向転換して、アメリカとかあちらのほうの発想方法に似たような形に一時ぐっと傾いたような気がします。これがまた第二次世界大戦の後でびよこつともに戻ったと思うんです。なのでそういう発想方法にいまになつてきているのか、それをいつも知りたくて、機会があれば

ばいろいろな人にご意見を伺っているんです。

深田 ひとつかしいな。

二村 ひとつかしいですね。ただ、私は外国に行きますときは、初めから多くを期待していきなさいのです。劣等感とまではいきなさいのですが、そういうふうに使われても仕方ない、それでもいいのだという風に。自分のやるだけのことをやって、もしそれに対して相手方がこたえてくれれば、これは望外の報いだというふうな気持ちになつてしまうのです。ですから、自分の肩書も必要のない限り、言いません。

高木 自分はこれだけ現地の人のためにやっているんだから、現地の人たちもそれにこたえてほしいという、こういうことなんです。日本人だからというんじゃない。

深田 香典返しみたいなもの(笑)。

高木 ほかの例ですと、チュニジアで日本人の方が、現地の自動車工場かなんかの技術者として、ホテル住まいですと三カ月ぐらい現地に滞在して技術を教えてもらえるんですけれども、その方が現地のたばこを吸っておられましたから、私が「それはおいしいで

すか」うかがいますと、「いや、これはうまくないんですよ」と、「ここにはたくさんアメリカのたばこがありますから、私はそっちのほうが好きなんです。ところがこの人はみんなこれを吸っていますから、私も吸ってるんですよ」とおっしゃるんですね。私はさっきと同じ話のような気がしまして。で、現地の方が見られたときには、あの日本人も自分たちと同じこのたばこが好きなんだなと思われないと思うんです。ところがその人は、まあ技術教育のために結構お金をもらって来ているわけですから、買おうと思えばいくらでもアメリカのたばこなんか買えるんですよけれども、みんなと同じようにやらなきゃというのは、これはやっぱり一つの日本人の同化思想なのかもしれません。そうすることによって自分は努力している、これだけ自分を犠牲にしているというところがその人に出てくるんですね。自分の犠牲が大きければ大きいほど、それに対応するものを相手になか期待するんじゃないですかね。

バーグランド 高木先生のその話に近いのは、僕がいままで会ったなかで伝道師です。自分は犠牲者として外国に派遣されていくん

だという気持ちをはじょうに大きく持っている人にたくさん出会いましたが、どうしてもああいう人は好きになれない。自分というものを犠牲にしているのを誇りに思っている。僕は二村先生とまったく同感で、自分というものを持っていて、その自分というものがぶつかってなにか返ってきたら、それは報いですが、別に期待はしない。

ただ、先生の大問題、日本の社会というのは全世界で特殊な社会であるかどうか、日本人論ですね。先生がさっき、日本のひじょうに狭い閉鎖的な考え方のなかで個人というのがなかなか強くなれないと言われたことを聞きながら、僕は「京都」とか「同志社」と置きかえたほうがいいんじゃないかなと、個人的に思ったんです(笑)。というの、最近東京へ出かけることがよくあるんです。東京の人間は、どちらかといえばアメリカ人に似ているような気がするんですよ。

深田 とうとう東京は同化されたか(笑)。

バーグランド 日本と東京というのが二つあるような気がするぐらいですから。最近、東京の人間というのはひじょうに変わってきて、個人というのが強くなっている。

深田 いま出されている問題は、ある面から言ったら、皆さんが日本という文化の枠組みを離れた体験がおありになるから、より強くお感じになっていると思うんですね。日本の社会のなかにどっぷりつかっていても、きっとそれを感じることはあると思うけれども、違うものに接することによって、いま自分がいる場がよりよく見えてきたり、そこに考えざるを得ない問題が見えてきたりすると思うんです。日本という社会がそんなに特殊な社会だとは僕は思わない。しかしやはり自分自身ありのままの姿であるということがきわめてむずかしい。歴史的にむずかしかった面もあると思うけれども、とくに私達はむずかしい時代に生きています。これはいまジェフの言っていることとちょっと矛盾するけれども、東京へ行ったらみんなひじょうに個人主義的であるという。じゃニューヨークに住めば自分らしく生きていけるかといったら、そうも言えない。画一化された、管理されたいまの日本の社会のなかの枠組みのなかで、東京の連中は個人主義的になりがちな面は確かだと思えます。

広い世界へ自分を広げる

バーグラント さて、これから青年達が世界へ出て行くという事に関して考えると僕はある意味で失敗したと思うんです。海外へ行くのは五年が限度だと思うんです。もちろん個人によって期間が違ふと思うんですが、一般的に五年超えたと現地の人間に近づいていき過ぎる面があって、自分がそこに生活してしまふ。自分の国に帰ってこない。だから僕がアメリカに帰っても、ほんとに帰れない。

深田 土地はあるんでしょ(笑)。

バーグラント 体は帰るんですが、精神的にもとの自分に戻れないんです。だから青年たちに、もし日本から出ていくなら、やっぱり自分の国のよさ、また自分の国のよくない面、なんとか直していかないといかん面、そういう面に気づくのにじゅうぶん長く、まあ一年以上の期間、しかしあまり長くなると、逆に日本になかなか帰ってこれない。

深田 リエントリーがむずかしくなる。

バーグラント だから行くんだったら、日本に帰ってくることを大前提として行つてほしい。

深田 ベッキー、五年が限度ですって。あなたはどうですか。

ティール もうあかん、私も失敗やな、(笑)。私もお金があればそういう生活をしたいなあと思うときがあります。一つの枠にはめてしまふのは、ちょっと窮屈です、いけないと思います。けどやっぱり民族の大事なものの、その精神もなくなると、またいけないですね。

私もたまにアメリカに帰って生活したらどうかなと思うときもあります。一つは、こっちで学んだものをむこうにも広めたいと思うからです。そういう機会があってそういうことになったら、どういう生活になる、どういうふうにも私も変わってくるかと、おもしろいと思いますね。

深田 自分の生きていくためのチョイスが多くなる。

ティール 広くなると思えますね。ある意味で、たぶん五年間が限度であるかもしれないけど、私も失敗に……。ほんとに帰りたいと思いますけどね。

深田 新島先生は長過ぎた。

バーグラント 新島先生の場合は十年が限

度でした。

深田 十年が限度。

バグランド で、帰ってきた。

深田 大物は長くいても大丈夫です(笑)。おしまいに近いわけですから、どうぞ言い残したこと、お思ひになっていることをお話し下さい。

二村 外国の方とつき合うのも、私たちが日本にいて日本人たちとつき合うのも、人間関係というのは、基本的には同じだと思います。やはり確たる自分をもっていないとどんな社会でもそれなりの評価しか受けられないと思いますから。

それから、毎年英文学科の若い女子学生がほとんど外国に出ていきますが、行かないよりも行ったほうがいいだろうけど、ただ、そのときに、どこに行くかということ、何を見てきて何を考えるかということですね。たとえばイギリスだと、必ずといっていい程「先生、あまり日程がありませんから、ロンドンに二、三日、それからパリに行こうと思います」と言われたりします。でもこれではイギリスはわからないと思います。むしろロンドンをとばしても地方の田舎に行つてごらんと

言いたいですね。先ほど東京の例が出ましたけれども、東京でもニューヨークでもロンドンでも、世界の大都市というのは似たり寄ったりですから、その国を知るためには、むしろそういうところを避けて、ごく普通のその国の人たちに出会えるようなところに入つていって、そしてそこで何かを見てきてほしいと思います。それでも、知り得たことはその国についてのほんの一部にすぎないことも忘れないでほしいと思いますね。

高木 私は、いろいろな経験を外国でしたときに、判断を下す前に、いつとき考えるところ癖をつけてほしいと思います。

たとえば東南アジアなんかへ行きますと、大きな店以外は物に定価がついていないんです。そういうところで買う場合にはだいたい交渉によるわけですけれども、日本人は普通定価のところで買いたいですから、なれていないのが普通です。友達と同じ物を買つて宿に帰つてきて、値段を比べてみたら半分のぐらゐの違ひがあったときに、高いほうを買わされた人間は、あんちくしょうめ、おれをだましやがったというので、すぐに、けしからんと、こういう発想をとりがちなん

だと思っています。

ところがむこうの人から見たらそうじゃないに、人を見る目がむこうの人はあったと、この人はこの品物の価値を知らないからこのぐらゐの値段を言つても売れるだろうと、こういうふうによく売るといふことは、むこうの人は売り手としてひじょうに才能があった。だからむこうの売った人は、悪いことをしたとは思つてない。そういうふう考えたら、自分は品物の価値がちゃんと見抜けなかったんだから、自分のほうがちょっとぐあいが悪かったんだというふうに考えて、いろいろな事象を見てほしいと思うんですね。そうすると、その国に対する評価も変わってくるんじゃないかと思ひます。

これは先ほどの日本人論と同じで、日本で名刺を交換しますと、肩書がどこどこ大学出身、現在どここの企業のどなと、それを知ることによつて、ああ、この人はこのぐらゐのところからこのぐらゐの平均的な人だろうというのが、日本人の相手に対する判断の仕方です。自分で、この人はどのぐらゐの人なんだということを判断することをほとんどしない癖がある。このぐあいが悪いところが、



そういうところにやっぱり出ているんじゃないかと思えます。

あるいはまたペナンブリッジ——ペナン島とマレー半島の間に橋がかけられたのがつい最近ですけれども、その橋の途中で交通事故を起こしたときに連絡するように、電話をつけたんです。ところが一晩たったら、その電話機全部盗まれていたという話があるんです。それを現地にいる日本人の方が聞いて、だからこの国はやれんのだと、こうおっしゃるんですけども、それはもう少し考えてほしいと思うんです。つまり、マレーシアのいまの段階では、その電話機を盗んでどこかに持っていったら、結構それが売れて自分の生活の足しになるから、まだそういうことをやるうというインセンティブがありますけれども、日本ではどこかの公衆電話機を盗んでも、どこへ持っていかっても売れないから盗まれないんであって、マレーシアの人間が日本人よりも泥棒が多いというような発想をしてもらったら困ると思うんです。だからその辺を少し時間を置いてとか、いろんな角度から見て判断してほしいと思います。

深田 かなりこれは象徴的なものの言い方

ですけれども、青年たちが旅行するというところにも触れましたけれども、われわれが自分の国、自分の文化を離れて、新しい体験として人に出会うとき、やはりバック旅行的なものはやめたい。一定のお膳立てがされたものに乗るということよりも、自分がいままです持っていた枠組みをとっぱらって、そして新しい体験することによって、最終的には自分が発見されていく。そのことによって自分の場がよく見えてくるし、その場に自分の足で立って、ものの見方がグローバルに広い世界に対して開かれて行く。そういう体験を出来る人がいけばいいまの世の中には必要人間だし、また幸せな人間なのではないかと思えます。

（一九八六年十二月一七日収録、於有終館担当理事室）